

昭和52年5月23日第3種郵便物認可 平成2年5月1日発行 毎月1回1日発行 通巻310号

かもしか



1990.5

No. 310

▽作品	自由吟三十句を十一組。平成一年既発表作品、未発表作品。	▽受賞者の顔ぶれ	第一回 細川不凍(当別)
▽選考委員	細川不凍(当別)	第二回 酒谷愛郷(伊万里)	第三回 古谷恭一(高知)
	大野風柳(新津)	第四回 西山茶花(岡山)	第五回 海地大破(土佐)
	尾藤三柳(東京)	第六回 桑野晶子(札幌)	第七回 金山英子(神戸)
	福島真澄(東京)	第八回 長町一吠(岡山)	
	片柳哲郎(横浜)		
	橘高薫風(豊中)		

第九回川柳Z賞・作品募集あんない

▽会費 不要です。発表誌希望者は、千円を同封してください。

▽用紙 出句専用紙を事務局にお申込み下さるごとく送付いたします。返送用封筒を同封ください。専用紙以外はご容赦ください。

▽締切り 平成三年一月三十一日消印

▽送付先 青森県下北郡川内町浦町 高田寄生木方(☎039-152) 川柳Z賞選考委員会事務局

▽主催 川柳Z賞選考委員会



長町一吠

五月号もくじ

第八回川柳Z賞特集

大賞	長町一吠
選評	時実 新子 尾藤 三柳 一六
選評	細川 不凍 寺尾 俊平 一八
選評	橘高 薫風 片柳 哲郎 二〇
選評	森中 恵美子 大野 風柳 二三
選評	福島 真澄 杉野 草兵 二四

茫洋と生きて 桑野 晶子 二七

誌上句会 「魔女」 菊池ふみを 三六

(162) 「魔女」 高田寄生木 三六

「そして」 佐藤 岳俊 三七

「そして」 野坂美智子 三七

川柳の赤鬼 杉野 草兵 三八

心残りのままに 吉田 州花 三九

宮本紗光先生を憶う 宮本めぐみ 四〇

まっすぐで、正直で 岩崎眞里子 四一

第八回川柳Z賞・大賞

(賞金 十万円・句集・津軽塗特製箱)

岡山市 長町一吠

咳き込めば無明棧橋傾かん
無明より無明へ渡る盲鳥
往く末を想う喉の芯まで濁かして
問うなかれ水當深くなるばかり
汚れし暦日 梵天に掌を差しのべし
探す言葉は地中にありや半月光
風蕭々 無才と想う韻字の橋
顧みるな無才に生きたる冬の下を
眼底の挽馬搏たれて嘶けり
傍られて斃れし挽馬たちあがれ
老いゆきて挽馬とて果しもなき
一行で挽馬が書けぬ咽仏
海嘯のひとつひとつが忌をもちくる
淳夫忌や街しろじろとして溺れ
蝉時雨展がるばかり母の屍衣

父母の忌を傍り足らずや落下蟬
愚かしき定型といる母の忌に
癡疾る斬り裂かれたり抱擁凶
浅き夢かや無数の挽馬来て嘶けり
水柱折れ墜つ落下無限の葬帰り
一灯消ゆる街に嘶く空間なし
産衣から屍衣までのこと曼珠沙華
稲穂の上を翔んでゆくのはわが喪服
わが墓地を購う日 道化の馬跳ねる
一生蕭々 一寒灯を見定むる
冬眠せんとする病妻を手囲いに
逆旅から逆旅へ妻のにぎり蟬
どこまでも病妻を想うて凍る魚
結婚記念日 怒薄のごとし鮫の群
哭かんとして哭かず眼なしの魚も脚なき馬も

選考のあとに

大賞	13 長町一吠(岡山)
準賞	11 西条真紀(岡山)
準賞	11 村井見也子(京都)
秀逸	10 渡辺和尾(愛知)
秀逸	9 石部明(岡山)
秀逸	9 伊藤律(宮城)
秀逸	9 広瀬ちえみ(宮城)
佳作	8 荻原久美子(東京)
佳作	8 加藤久子(宮城)
佳作	7 板東弘子(香川)
佳作	7 樋口由紀子(兵庫)
佳作	7 樋口仁(三重)
佳作	7 菊地俊太郎(東京)
佳作	7 情野千里(兵庫)
佳作	6 山本磔(京都)
佳作	6 板橋映水(宮城)
佳作	6 大谷晋一郎(香川)
佳作	6 野沢省悟(青森)
佳作	5 普川素床(千葉)
佳作	5 岡崎一也(岡山)
佳作	5 海地大破(高知)
佳作	5 吉田浪(岡山)

第八回川柳Z賞・準賞

(賞金 一万円)

岡山市 西条真紀

馬疾る 夢のもろもろ短命な
 涙にかぎりありて薄暮の手毬かや
 うす墨の語り継ぎたき こだまかな
 ひとつの別離欠けた鶴首を見つめおり
 いちにち中也 膝いちにちを噺り泣く
 冬の巡礼春の巡礼見す鎮魂
 戻り梅雨 人のことばも徒勞のなか
 月蝕けはじむ黒い法師のよろぼうて
 鯉涙の冷えゆく座して幾夜かな
 やがて滅ぶる身を洗いたる遠き雷
 子守唄 ははが唄わば ははの哀
 夏やせの肩のさびしき藻と流れる
 顔上げる蒼き馬上のさむからむ
 幼な櫛夢のまやかし信じししか
 許されて拙なき嘘は訝する

吾もまた額すく疊 老母のごとく
 貧しき詩 母子で頒ち紅葉す
 蝶つまる翔べぬおんなの紅葉闇
 浅い寝覚めが双手に残る こぼれ落つ
 人形がわれを瞳める 善女たれ
 すこしづつ夢に散らせるわくら葉を
 枯野までころがるまるきいのちかよ
 花の季をみじか詩にて泣き泣かん
 ひと日臥し華曼陀羅の華の影
 もろ手つき凍土の鳥と夢に遊ぶ
 山鳥を目で追う もとより訝なし
 明日ありや胸に掌を組む曼珠沙華
 いなづまや 瞳の澄みてわが遠野
 くるくると指に葛巻き葛の妻
 影踏み遊びを夫と夜明けまで

- 佳作5 梅崎流青(福岡)
- 佳作5 山根素蛙(岡山)
- 佳作4 河瀬芳子(大阪)
- 佳作4 佐藤岳俊(岩手)
- 佳作4 山本乱(福岡)
- 佳作4 林荒介(鳥取)
- 佳作3 海堀酔月(大阪)
- 佳作3 嘉瀬信柳詩(北海道)
- 佳作3 盛合秋水(岩手)
- 佳作3 高橋かづき(兵庫)
- 佳作3 坂東乃理子(東京)
- 佳作3 上島みゑ子(京都)
- 佳作2 芳賀弥市(宮城)
- 佳作2 外山あきら(福岡)
- 佳作2 柿木英一(大阪)
- 佳作2 新正子(鳥取)
- 佳作2 高田政旗(北海道)
- 佳作2 野田伸吾(福岡)
- 佳作2 佐藤みさ子(宮城)
- 佳作2 高橋佐知子(神奈川)
- 佳作2 須川千恵(東京)
- 佳作2 西浦小鹿(鳥取)
- 佳作2 松本春道(福島)
- 佳作2 阿野文雄(宮崎)

第八回川柳Z賞・準賞

(賞金 一万円)

京都市 村井見也子

春はすぐ包丁研ぎがまたこない
 指一本立てて炎になる刻を待つ
 愛憎のはざまで花を買い占める
 花菜からとどく多情も仏心も
 レモンの黄浮き沈みしてまだ他人
 生まれ出たぬくさでのぞく井戸の底
 とまどきの魔がさす時をたいせつに
 血の通う受託器を放す春の雨
 忘れようにも神を騙した傘だから
 相對死するのちようどいい季節
 地下水の匂うあたりで待ち伏せる
 発酵の刻がきている稲光り
 新しい暦もすでに疵を負う
 住み馴れて斧一本の置きどころ
 したたかに転んだあとの身のまわり

あと戻りできぬ憎さで粥を煮る
 大根を煮るにんじんを煮る身のおかし
 戯作者になつてしまった皿小鉢
 箸を置く音をうつかり聞きもらす
 小咄で終ってほしい対の腕
 蚊柱のなかへみじかい旅をする
 水高やいくど別れを口にする
 いつかいつか男を殖す紙つぶて
 祈らねばこのわたくしが毒になる
 歳月や契りの酒も底をつく
 冬仕度のひとつに落し文を書く
 傘は低め 人も情けもやりすぞす
 雪降ってあざやかになる飢餓草紙
 我慢くらべだったか父母の骨壺も
 いつか地に還る この辺まで来た

- 佳作1 本多洋子(大阪)
 - 佳作1 松原葦男(福岡)
 - 佳作1 平田郁子(香川)
 - 佳作1 立原みさと(高知)
 - 佳作1 加藤かずこ(北海道)
 - 佳作1 平宗星(東京)
 - 佳作1 玉利三重子(奈良)
 - 佳作1 佐藤奏月(大阪)
 - 佳作1 久保田美椰(兵庫)
 - 佳作1 桐越千絵(北海道)
 - 佳作1 石田寿子(三重)
 - 佳作1 岩崎眞里子(青森)
 - 佳作1 大橋政良(北海道)
- ★時実新子選
- ・特選 荻原久美子(東京)
 - ・秀逸 河瀬芳子
 - 秀逸 山本乱
 - 秀逸 村井見也子
 - ・佳作 菊地俊太郎
 - 海地大破 平田郁子
 - 普川素床 佐藤みさ子
 - 坂東乃理子 上島みゑ子
 - 柿木英一 石部明

秀逸

東浦町 渡辺 和尾

乱熟の卵潰せば短い冬日
噴怒溢れこの街角のいすこの穴へ
棒状五寸に足らぬ迷いの傷を見よ
贅肉交差して雪の町には雪の禁句
石と化し獅の張り子を待ちたる人
千匹の蛇胸中に住ませし殺せし
樹海人海 鬼気の迫るはこの辺り
はりつけの刑いさきよし海苔茶漬
飛び散って 男ひとり罪かぶる
動脈血くらやみの果ての地獄へと
調律師いる季節はずれの狂気の斑
半世紀臥して弾丸胃の端に錆びし
霧採みの春月 蜂らは橋の下にて
こめかみに勝ち負けという青い痣
薄命の鬼神踊りもたけなわなりぬ
蒼穹あろつと疾駆する體ぶら下げ
桜はらはら鳩尾めがけ降りしきる
足を拘われ酒は旨しというべきか
地の底の喘ぎの声のひとりを救え
骨たらけの荒野に巫女は一人住む

秀逸

和気町 石部 明

いちめんの咽喉に疵持つ彼岸花
やわらかい髪降りしきる眼の闇
花びらをあつめて死者の形にする
人体のすみずみにまで水流れ
いのち揺れくらしい彼方へ放尿す
老残や月にかざしてみる眼鏡
蛇穴をでて行くあてを持たざる身
すすき揺れ野の仏壇の見えかくれ
屈辱は死よりも冥く白湯ふくむ
形骸として一個ずつ父を生む
首すじをのぼりつめれば母の痣
月光は死者のくちびるより零れ
くらがりに眼玉を洗う音がする
とはぬ鳥一族はみな寡黙なり
こごとくく血は割るべし無神論
眼帯の裏側ばかり激しい雨
狂えずに吊る鳥かごに父を飼い
火葬場の裏へまわれば火天のシャツ
狂院のひまわり園を聖地とす
息つめて水底のもの見ておりぬ

秀逸

仙台市 伊藤 律

あかつきの蝶より白き鼻染かな
蒼天を馳すべし爪の紅ければ
夕顔に溺れて白きつねりかな
純愛のぶらんこきみを乗せ給え
未明から未明へ赤い梯子売り
碑の風浪 いまも風浪
発熱や滅するものを抱きしめる
体内の星を掃いてる尋ね人
産道や嬰兒たらむとして走る
竹といちにち竹より青い息をして
刑場に馬曳く一族たらむとして
「死に至る病」 朝霧光るとも
わが死後のわが墓原の水晴れて
父酔つて唯みずいろに立命す
父眠る星の発熱ある限り
噴水のある景父よ起ちませい
喉に大きき水河の父らの生家
点滴や父にさぶらう伽藍たち
一族の波動で墓場に干す布団
あけばのや風の行手の父なる法師

秀逸

仙台市 広瀬 ちえみ

カンカンと渴くところに秋のバス
どんぐりが何に勝ったというのだろう
さらわれる期待 小さな舟が来る
スキップしておまえは蛇の棲む森へ
何を見に毬がはずんで旅に出る
マーチ鳴る どこまで歩かされるのか
クシャクシャに丸められても私です
魂も肉も重いと思う日よ
ふとよぎる逃亡 坂を上りゆく
かなしみを焚いて暖まりませんか
さびしくて一日早く咲いてしまふ
尋ね人よ 道の長さは伏せておく
猫と同じ 私も鈴をつけている
泣きやんだ頃に電話をかけてみる
ひまわりの孤独に誰も気づかない
押し合って薄い縁のバスに乗る
一匹の金魚が空に焦がれ死ぬ
午後からは少し哀しくなるドラマ
読みかけのまんまで死んでゆくだろう
このバスでいいのだろうか 雪になる

西条真紀 情野千里

★尾藤三柳選

・特選 樋口 由紀子(姫路)

・秀逸 加藤 久子

秀逸 海堀 酔月

秀逸 樋口 仁

・佳作 本多 洋子

村井 見也子 松原 葦男

高田 政旗 加藤 かずこ

伊藤 律 菊地 俊太郎

板橋 映水 岡崎 一也

松本 春道

★細川不凍選

・特選 渡辺 和尾(東浦)

・秀逸 西条 真紀

秀逸 情野 千里

秀逸 広瀬 ちえみ

・佳作 梅崎 流青

石部 明 野沢 省悟

伊藤 律 佐藤 岳俊

長町 一吠 山本 磔

菊地 俊太郎 桐越 千絵

山根 素蛙 吉田 浪

★寺尾俊平選

・特選 石部 明(和気)

・秀逸 渡辺 和尾

秀逸 菊地 俊太郎

秀逸 大谷 晋一郎

・佳作 高橋 かつき

長町 一吠 村井 見也子

吉田 浪 梅崎 流青

野沢 省悟 情野 千里

阿野 文雄 林 荒介

加藤 久子

★橋高薫風選

・特選 山本 磔(京都)

・秀逸 広瀬 ちえみ

秀逸 樋口 仁

秀逸 山根 素蛙

・佳作 普川 素床

外山 あきら 高橋 かつき

新 正子 高橋 佐知子

西浦 小鹿 佐藤 奏月

山本 乱 坂東 乃理子

石田 寿子

★片柳哲郎選

・特選 西条 真紀(岡山)

・秀逸 伊藤 律

・秀逸 伊藤 律

佳作 中野区 荻原久美子

閉じた瞼の下にひろがる野火その他
鉄線運 喪は水槽に放つべし
少年の眉の匂いの菜の花抄
ケモノヘン カフカの闇のたわわなる
忘却という優しき夢魔を飼いならす
夕闇の鼻しずかなり 断崖
生き残る術のひとつに空涙
淋しさを許せば碧きミモザ咲き
あながちに鳥語人語を吹雪かせる

佳作 岩沼市 加藤 久子

玉ねぎをみじんに運河晴れてくる
鉛筆が一本折れて他人のなか
ガラス触れ合う日溜りを逃げてきた
フライパンの重さと春の水平線
昼の月何処を漂っている骨か
菜種梅雨昨日の象はもつ来ない
人参じゃがいも 深い海から手紙
青い電車とどこまでも渴いてゆく
揚げ雲雀柱に重い血の流れ

佳作 四日市市 樋口 仁

終電の網棚にある残尿感
その次の交差点には水がある
表札のなかのきれいな鼓笛隊
やさしさの芯まで傘を差しかける
子のはるに拉致されてゆく父の春
靴下の中を電車が走っている
打撃戦らしい花屋の店先も
粥を炊く夕焼けの火をとってくる
立つことの哀しみがある寒玉子

佳作 文京区 菊地俊太郎

郵便受けにもぐり込む新しい菌
やたらと空箱の降ってくる街だ
廊下の角の問答無用の足はらい
電気カミソリが吸ってる朝のうわ言
綱を張るボクが逃げ出さないために
狭苦しい個室の中の放浪
素手ではらつ頭の埃棚の埃
腹背のタイヤの痕がまだ消えぬ
ニカワ鍋に落っこちた虫の恍惚

佳作 国分寺町 板東 弘子

野火走る老母に深い十踏まず
花野暮色風に斬られて風になる
風の笛 雪ひとひらが神にあう
眠りつづける母のまなこにあるか 野火
蒼天へ流浪となるも竹の櫛
盛飯を抱えてまたぐ雨季ひとつ
雨に洗われ羅漢一体母になる
眠りから醒めたら疾れ春の絵馬
風群れてくるはらからの静けさに

佳作 姫路市 樋口由紀子

足首に青い病気を持っている
少年消えて婚礼布団高く積む
淋しい耳にぼつんぼつんと象の声
蛇口全開 獣のような花が咲く
長い廊下の一箇所にある少女の忌
神様の解いた紐が首にある
ナルシズムで男は男のまま残る
太陽は真上 存在感を問いただす
禁猟区の森でポットの湯を捨てる

佳作 姫路市 情野 千里

なにもない壁に蝶来るおとつと忌
いつも空腹 猫目石が光る
夫のための卵を割っている 暗い
鯛の腹をおんなが匂うまで破る
眉を引く雨の強さに負けぬよう
吃音はじまる赤い夢みた少年たち
獣曼陀羅 耳から耳へ火を移す
うっかりと三指をつく月の宿
くすぐったい耳 椿の声が舒して

佳作 京都市 山本 磔

テークアンドテーク男の絵が消える
正しいことはむなしなことだ寺山修司
浮くときも他人を信じつづけよう
流人になるポケットをもっている
もう彼の空気が抜けた頃だろう
誇りある 屈伏たとしても
時にはゆらりと太郎冠者のように
亡父をかくし亡母をかくして芒の穂
顔はいつもビククリ箱をもっている

- 秀逸 吉田 浪
- 秀逸 長町 一吠
- 佳作 渡辺 和尾
- 上島 みる子 石部 明
- 立原 みさと 板東 弘子
- 広瀬 ちえみ 加藤 久子
- 河瀬 芳子 情野 千里
- 岩崎 眞里子
- ★森 中 恵美子 選
- ・特選 村井 見也子 (京都)
- ・秀逸 大谷 晋一郎
- ・秀逸 佐藤 岳俊
- 秀逸 梅崎 流青
- ・佳作 樋口 由紀子
- 野沢 省悟 加藤 久子
- 林 荒介 樋口 仁
- 芳賀 弥市 高橋 佐知子
- 久保田 美椰 上島 みる子
- 阿野 文雄
- ★大野 風柳 選
- ・特選 板橋 映水 (仙台)
- ・秀逸 普川 素床
- 秀逸 嘉瀬 信柳詩
- 秀逸 盛合 秋水

- ・佳作 芳賀 弥市
- 坂東 乃理子 新 正子
- 広瀬 ちえみ 高橋 かつき
- 海地 大破 菊地 俊太郎
- 外山 あきら 山根 素蛙
- 情野 千里 林 荒介
- 立原 みさと 大橋 政良
- ★福島 真澄 選
- ・特選 板東 弘子 (国分寺)
- ・秀逸 岡崎 一也
- 秀逸 長町 一吠
- 秀逸 野沢 省悟
- ・佳作 西条 真紀
- 石部 明 加藤 久子
- 野田 伸吾 伊藤 律
- 須川 千恵 渡辺 和尾
- 広瀬 ちえみ 高田 政旗
- 村井 見也子
- ★杉野 草兵 選
- ・特選 長町 一吠 (岡山)
- ・秀逸 伊藤 律
- 秀逸 海地 大破
- 秀逸 荻原 久美子
- ・佳作 板東 弘子

佳作 仙台市 板橋 映水

水は透明と限らぬのだ妻よ
子を赦す飯がようやく炊きあがる
皿がまた毀れて非人小屋を生む
冬の帯解かぬおんなの正楷書
尻尾振りながら喜劇の中で死ぬ
いつからか胃に棲みついた狙撃兵
蛇口からしたたる罪は軽くない
柩から出て消しゴムを探さねば
求人欄まだ降りて来ぬ縄はしご

佳作 高松市 大谷晋一郎

秋の日の河の澁みよ羊の群れに
いぶし銀になれぬ男の蕎麦杖
終日を神にうたれて河の果て
千本の棘抜く禱り蒼大に
猿百態に僕の文化は知れたもの
狐火が去らぬ枕の人臭し
夢人もキリンの首も人恋し
風を掬うなんのためらうもの故里よ
けもの臭い樹海の匂い素足になる

佳作 青森市 野沢 省悟

繭のひとつが創りつづける父の闇
血の濃さは雪の深さはまぼろしで
子蟹這いゆく溺死の父を食べるため
桜貝 死産した娘の世界は何処
吹雪のなかで羽化をしようと唇ひらく
唐辛子のひとつぶとなり父を逃げる
快樂の魚を生みつつ焼きつつ吹雪
昏睡の冬のいちごを火にくべる
置き去りの筆箱が鳴る遠い虹

佳作 市川市 普川 素床

舟を赤く塗り海の火を盗みにいく
無人列車暴走くちびるを閉じる
存在の赤さに秋の灯がしみる
未来から過去へ点いたり消えたりしている電気
人が湧くうれしさ階段を降りる
無がみちて南瓜の頭をばくばく叩く
これは頭ではありません私の帽子です
吊るしでは嫌ですもつと木の葉を下さい
でも、先生天使の服装だけはやめてね

佳作 岡山市 岡崎 一也

乳母車逃げた記憶をもっている
逆も又真なり子の手いつ放す
内縁の続く限りの菜を漬ける
脇役が死んだ日豆腐を手で潰す
レモン一顆 妻が戻らぬ黄昏れて 冬
何の咎 出合いがしらに人が死ぬ
とても寒くて 一万円を両替す
さくら東風 火炊きおんなは消えました
足袋はだし寒月光に晒しけり

佳作 土佐市 海地 大破

語り部の口がたちまち風になる
寒林に黒い衣が歩み寄る
いつか死ぬその日のために歯を磨く
鳥籠を覗く変化のない朝だ
長生きをしようとおもつ朝の粥
袋よりこぼれた種の反乱よ
菜の花の黄に逢いたくて傘をさす
蝶墜ちて天のかたちをこなごなに
あつげらかんと叛いて枇杷の種を吐く

佳作 岡山市 吉田 浪

哭くならいの スカーフをとく風に解く
うつせみに ちらちら眩し秋の蝶
黒髪や まことさみしき火の祭り
沈黙のひろがりに湧く芥子の花
まなつらに椿が落ちる 眠れない
愛憐のてまくら やがて石枕
隠し絵に雨が細かく降ってくる
愛日や きりきりと抱くギヤマンの壺
おんななり 風にまみれている刹那

佳作 柳川市 梅崎 流青

冬色のナイフで刻むおとこの名
葬ありて鳩の鳴きごえ曲折す
透明な音では打てぬ棺のくぎ
たんすの奥でいまも回っている映画
血を吐いた過去など言わぬ冬薔薇
粉こなの茶碗に深い愛がある
薬灰の温さに母が居て困る
欲情の兆しを桃のせいにして
ろつそくの真上の風に気がつかぬ

- 岡崎 一也 柿木 英二
- 平 宗星 玉利 三重子
- 西条 真紀 松本 春道
- 加藤 久子 樋口 由紀子
- 野田 伸吾 林 荒介
- 須川 千恵 西浦 小鹿

川柳Z賞受賞者の顔ぶれ

- 第一回 八三年 細川 不凍(当別)
- 第二回 八四年 酒谷 愛郷(伊万里)
- 第三回 八五年 古谷 恭一(高知)
- 第四回 八六年 西山 茶花(岡山)
- 第五回 八七年 海地 大破(土佐)
- 第六回 八八年 桑野 晶子(札幌)
- 第七回 八九年 金山 英子(神戸)
- 第八回 九〇年 長町 一咲(岡山)

一次選を廃止した初の川柳Z賞応募作品と向き合った選考委員の方々の苦闘が選後感からも伝わって参ります。選考委員、出句者、作詔募集要項を掲載下さった各誌に心よりお礼を申し上げます。

川柳Z賞選考委員会・事務局

無冠消ゆ

長町 一咲

Z賞受賞の知らせを受けた夜、妻は赤飯と、鯛を用意した。川柳で赤飯を食べるなど考えても見なかった。

金山英子は電話口のむこうで「いぶし銀」のような一咲が大賞を買ったと、わがことのように喜んでる。私は少し照れながら赤いワインを掌にした。

数年前、某女性作家からZ賞を夫婦のどちらが先に貰うか興味をもって、と言つハガキを買ったが、くだらぬことで返事も書かずそのままにしておいた。

わたしがこの企画に参加した理由は他でもない、永らく創り続けて来た私の作品を誰れかに認めて貰いたい、作品提出理由は只この一点にあった。大賞はこの一点に付いて来た別の結果だと思ひ赤飯を口にした。

ワインを飲み終え無冠の一咲は消えた。

略歴

川柳岡山・せんば・平安・展望を経る。新京都同人・ふあつと・とまり木會員昭和六十三年 句集「道」刊行。

佳作 勝央町 山根 素蛙

なめらかな母韻が包む月の暈
月の暈おおせの通り葬が出る
蝶白態いのちの蜜が失せしより
君だけに言う夕顔がまっ盛り
童話作家の非力で熟れる冬母
父も教師で血回しが下手だ
絶筆をゆっくり鉛は転がりぬ
氷河期へいつも向いてる象の爪
一斉につっかい棒が飯を食う

大野

佳作 高槻市 河瀬 芳子

紙いちまい ぐざりと胸を刺すことも
ピタミンをバリバリと嘔む 夫の死後
闇をみすえて私の息をきいている
女がおんなを憎いと思う 冬火花
深い眠りが欲しくて立っている枯れ木
老兵を泣かせる梅が咲いて散る
消して書いて生きると言っはそんなもの
矢じりを磨く おとことは寂しいですね
改札口 すこしひるんでから抜ける

佳作 胆沢町 佐藤 岳俊

雪泣いて長靴の下村消える
丸太割る冬の落日胃に刺さり
凍る十間三羽のすずめ歩いている
だれのため廃屋の村ばつんばつん
ぼろんぼろん泣いて野仏雪を着る
いくたびの弾圧田螺泥の底
菓腐れ祖国の土のひとにぎり
凍土掘りゆっくり下ろす雪の棺
休田の雑草のぞみ捨てはせぬ

流青

佳作 大牟田市 山本 乱

振り返る何か毀れる音がして
通り雨いづれ忘れてしまうこと
コンパクトの中の他愛もない焰
上澄みの部分で今は通じ合う
重ねても重ねても影法師
足跡が野の真中で消えている
羽織の紐も上手に結べないくせに
むしのいいことを思っばかりいる
風船に邪心をこめているのです

佳作 米子市 林 荒介

連綿と鐘は山脈を越える
今者定離昨日に続く主語を持つ
吊り橋を渡るあなたを見ています
春を焚く七草粥にははが居る
残された祈りの中の洗い桶
沼よりも深いところに置く枕
黄昏れて燐寸を探す巢を探す
影を掘り起せば夥しい獺
花を焚いても白画像未完のまま

佳作 堺市 海堀 酔月

助演賞止まりと知らぬブルータス
風紋は輪廻のかたち 素足の砂丘
点滴終る九千三百十二滴
飼い馴らされて花七彩の虚を飾る
泣きながら走ってくる今日の電車
妻の使う漬物石が重すぎる
先割れスプーンに続く単の行列
象の尻尾に劣等感を持っている
猿が木から落ちる銅貨一枚の時間

佳作 札幌市 嘉瀬信柳詩

笑う樹がいつぱんあつて救われる
火葬場のこの明るさはなんだろう
枯野から枯野へ今日も酒買いに
鉛筆を削る狂気を奈落まで
火祭りが終って闇を懐に
割れば火を放つ能面かも知れぬ
露ゆでるくらがり母の背の鬼火
娘もいつか母の業火を見るだろう
いつぱんの縄からさむい物語

佳作 宮古市 盛合 秋水

初日の出答案用紙を渡される
たましいの揺れを鎮める海の内る
ある出会い川はゆっくり流れてる
水割の水のところで人に逢う
穉藻のような愛が欲しいと思つ夜
月の暈みんな味方と思つ日よ
割られても自説を曲げぬ桃のたね
石ころも二度ひ蹴られて笑いだし
引出しに青いトマトが一つある

佳作 西宮市 高橋かづき

一斉に一月となるカレンダー
わたくしにひとつの名前点滅す
好きになる朝日のようにまっすぐ
紅をさす清く正しく美しく
啄木をまねて蟹など相手にす
ニンニクもネギもユリ科よ逢いたいな
いっぴきのてんとう虫を手につわせ
話し相手になって下さるお月さま
ふわふわわりふわふわわり五月くる

佳作 武蔵野市 坂東乃理子

季節風吹くときこえる鈴の音
大切なおもちゃこっそり捨てておく
ひそかに進む恋と虫歯と近眼と
体内にはほこりが少しずつたまる
この齡になってもこわい掘こたつ
焼鳥屋さんは私の元上司
妹がいて本日は軽い鬱
怒り消え失せて包丁研ぎおわる
小鳥を放し自由になったのは私

佳作 京都市 上島みゑ子

鳥が鳴く花も匂うて手暗がり
卯月いま卯月の傷はしづくする
白くしろく洗いつづけて死におくれ
猫の爪坂の途中はみな他人
後頭部春が兆してきたらしい
まなこ二つ欲しやほしやと花筏
目ぐすりに玩具の汽車は発車する
雨期なのかひとり芝居に呼ぶものは
蛇の背のみどりを深くする仏

佳作 仙台市 芳賀 弥市

地に乱れあり卉蔽の萩芒
思うことありや柿色に柿が生る
菜鳥や風観音の花
冬天に呼ばれ予感の泣きぼくろ
薄薔薇色の雲の行方の混沌と
鳥葬にされし隣のピアノ弾き
通り魔は見捨てしならん石榴の実
風の来ぬ花屋で花は衰えぬ
曇天はかくも重たし背の傷痕

佳作 大牟田市 外山あきら

ここにもさくらんぼうがなっている
骨を外して父がゆっくり寝ているぞ
熱っぽいのは夜さくらのせいだろう
猫一族の復讐めしを食べ残す
男の庭におしろい花が咲いている
父は一度白馬に乗りたがっていた
風に葱が折れる小さな刑だろ
樹を切り出す父に一本指がない
進むと告ぐ退くと告ぐ討死にす

佳作 大東市 柿木 英一

胎内へ降りる月夜の縄梯子
魂の深いところで散るさくら
老醜のふぐり失語の軽さなり
仏心や蝶のかたちで蝶は死ぬ
人形の愛を人形師は拒む
毬唄が消えたはねぎ畠のあたり
文庫本春の尻尾が欲しいのか
深みどり峠の犬は今朝死んだ
籬越す楊羽の黒が僕を斬る

佳作 米子市 新 正子

満月の屋根で吠えているのは誰だ
見てピタリ当たる易者に用はない
いい妻と言わせる程の悪女です
十八の息子が駒になる入社
天井に羊一匹飼っている
添い寝して何と命のいとおい
私の影にアイロンかけ直す
ホープだと言われ続けている毛虫
地下街の柱太くて恐くなる

佳作 札幌市 高田 政旗

昭和残像ごきょうはこべらほとけのぞ
生きていることの音あり冬の爪
藪屋の前に佇む平成元年
連山如月しろい答が降っている
ひとつになるたましい赤い点滅
白線の内側はるの小銭入れ
歯医者からひよっこり帰る便乗値上
大きめの靴に入れる雨天決行
小降りにはならぬならぬとダンス音楽

佳作 福岡市 野田 伸吾

難破船出てゆく沖の曇気楼
彷徨や落日に身を焼かれたり
瘦せし男 秋と一瞬溶け合えり
放浪や長く伸びゆく犬の影
火を焚いて手のひらの闇ぬくうする
風の樹の愁いを深めゆく まなこ
流転かな心の色の水を飲む
血の濁り母の乳房を見し日より
白い都会の風にころがる淋しい掌

佳作 仙台市 佐藤みさ子

降雪の途中の長い景色かな
ラクダ一列ノートの土を歩き出す
あなたのための赤児のように泣く時間
何を頼りに生きているかと魚に問う
猫の領分死者の領分踏みこめぬ
冷めた炎で毎日かゆを炊いている
真昼間のシャッター降るす音の悲しみ
ペーパータオルの湿った山の他人の手
髪の毛がいつでも粉れてむサラダ

佳作 海老名市 高橋佐知子

悲しみはあじさいに似て変わりゆく
花火はいつも私のほうを向いている
とりあえず記念写真を撮りましょう
友達の不倫の話おもしろし
すぐすねる男を一人もてあまし
コマネチも太り私も太りだす
タオルなど投げいれないで嫁姑
平成の子供も産んでおこうかな
満月の夜少しだけ美女になる

佳作 文京区 須川 千恵

ガベラのあつけらかんが許せない
振出しに戻る小さな荷を作る
幸せを探しあぐねて冬籠り
涙腺がもろくていつも負け戦
目を据えて楔打つ人見定める
裏切りをだまって見ている猫柳
水仙の男嫌いは根が深い
正座して女もほぞを噛んでいる
少々の事では泣かぬ紙の花

佳作 鹿野町 西浦 小鹿

誰もでぬ受話器のなかに海がある
引力に負けてはいない青リンゴ
表札に男の重い息を知る
善人の顔して毒を売り歩く
捨てられたおもちゃに蝶が飛んでいる
キリストの微笑みのなか顔を踏む
雑踏に僕らの笑顔がつぶされる
火を踏んで男のロマンもちつづけ
先生が地平線からやってくる

佳作 小高町 松本 春道

じゃがいもの花涼やかに死者の列
花影無残 闇に転がる無数の首
履き捨てた下駄に拘る風の落人
対岸の火事に咳込む春の飢え
死馬を疾くさせているオモチャ箱
逆縁の馬車く父を刑場に
石段に飯を零して四十路の呪詛
狂院を覗く眼帯いちにち晴れ
春の計や切手一枚ゆきだおれ

佳作 えびの市 阿野 文雄

戦後とはいつまでのこと喪降る
自分を見つめるための目玉がふたつある
ライバルを討つ追い風があるうちに
ぼろりぼろりと本音をこぼす盃よ
緞帳の裏でしきりに汗を拭く
亡母の樹を哭かさぬように灯をともし
耳にかすか私が枯れてゆく音か
家族みんなの耳まで染めている夕陽
妻に贈る言葉あるにはあるのだが

佳作 松原市 本多 洋子

生きたとは死ぬとはパンが焦げている
蛇は怠惰に朱の山脈を横切った
坂で疼く青梅ひとつ踏まれて
水脈は母につながる悲につながる
手紙破るあじさいは今朝妊りし
雨は本降り円空弘は人の臭い
父の岩 父はめだかを飼っている
消費税をカリカリ揚げる片口いわし
虹の中でわたしもルノールも光る

佳作 顛田町 松原 葦男

睡る女の眉がいつのまにか消える
木枯よ いち族の血はまだ温い
まだ未婚 大幸治を昼から読む
綾取りの橋がゆれない姉の指
夕張の傷まだ癒えず昆布採る
カナリヤも死んだわ寒い夜明けです
父の影が消えた 軽い骨になった
旅にでてくくらい家系の血を替える
梅干を食らうて崩す髪かたち

佳作 善通寺市 平田 都子

影を追う軽い気持ちのはずだった
作業服の似合う男の汗が好き
バスを待ついつか別れた頃の雲
気紛れな風が乳房にふれただけ
逢えるなら過去の話は止めにする
薄情な男を慕っ茄子の花
やがてひらく月下美人も私も
ささやけば小さな愛が消えそう
いらだちをかくしきれない砂時計

佳作 松原市 佐藤 奏月

遊んだ後の風呂の広さがさみしいな
湖が凍る一人で生きられぬ
僧伽に立つときと聞える川の音
真雪な海から湧いてきた燕
人を憎む心をだいて三日死す
マンモスの骨が光っているサロン
でんどん虫角ひっこめてから頑固
美容院男に髪を洗わせる
履歴書を一度も書いたことがない

佳作 神戸市 久保田美椰

十階の死ぬる高さの窓に居る
風の声夢は幾度破れたか
この街を出ようか肩の雪払う
死はいつも遠く 信号青になる
幸せを話す男といて淋し
目が合って最後の言葉持っている
まだ許してはいない横顔だと思っ
ひと駅を風とあなたと歩きます
この一夜すべての神に背いても

佳作 土佐市 立原みさと

さらし柿男の骨がもろくなる
錆ついたレールで唄うきりぎりす
鎮守の森まで続くかくれんぼ
涙から生まれた花の底力
和菓子に母は女を閉じ込める
名残の花が知ってる深い業
子を持たぬ女が捨てた白い絵具
冬あじさい想い遂げずに咲いている
あばら骨観音開きで暴かれる

佳作 札幌市 加藤かずこ

カイワレ族が皿を割るのは絵ぞらごと
カレー皿が驚る青い馬消えた
真夜中の鏡出てゆくアヒルの子
ワープロの自慰へ転がる青りんご
小猫の泪をみている水中花
プチトマトの反乱 いびつな食卓
一族のみどり少年食べ尽くす
コップの中の夕陽飲んでる金魚たち
二の腕がこんなに重い欠け茶碗

佳作 広島町 桐越 千絵

雪やこんこん梅はころびる夜着の中
子を産みし縮図一枚膝にあり
すってんてん吹雪も食べた男の歯
雪を蹴る茶色いブーツ狐独蹴る
奔流をよこぎったのは蝶か馬か
テレホンカードひろがってゆく鴉の群れ
春雷や偏差値の坂ころがる帽子
短かい手足散らばっている逆立ちの街
指先に赤いランプのいっぽん道

佳作 四日市市 石田 寿子

北風をなんまいも着る父の背よ
新しい狂を探して本屋まで
雑草や 思想は横に流れゆく
吃水線がだんだん上るめし茶碗
突然に折けぬ手紙を焼くまでは
目の黒き魚裂く一途な愛と云う
もついっぱいの水は他人の為に汲む
太陽が沈むとひらべったい闇だ
海抱いてきた老母からの荷を開く

佳作 杉並区 平 宗星

一枚の舌のうしろに海がある
列なして枯野を歩く影法師
魂を蝶結びして逢いにゆく
ネクタイの裏に戒名がある男
深爪の小指に赤い月が出る
抜いた歯の後にひゅーんと鬼の慟哭
行く先は問わぬ金魚のひと雫
髪切虫 濡れておんなの髪を切る
赤い傘忘れて爬虫類になる

佳作 奈良市 玉利三重子

手踊りの帽子の裏の満月よ
感情があふれて虹になりました
青が吹き抜け少年は少年に
横にいるさみしい影はわたしだな
ポケットの底から一枚の錯謬
贖罪や花の数だけしずくする
お試しになって下さい致死量か否か
わが胸に棲むいびきの冬ほたる
片身救がれて泳ぐも神の思ひ白し

佳作 黒石市 岩崎真里子

ゆでたまご むいてもむいても母ばかり
たまごから生まれた月と月見草
月ゆらり 孤独の影を吸いあげる
見てばかり 見られてばかり 遠い月
湖が近くて月は泣くばかり
母の湖 越えてゆけない月の蒼
ため息も月も綿菓子 残される
存在のあかし 一本のマジック線
倦怠がうすむらさきに満ちていく

佳作 砂川市 大橋 政良

ぬいぐるみ借りて羽化するテロリスト
その先が読めず金魚の糞となる
バラ咲けり真っ赤なところ人臭き
長靴に嘘がたままって重くなる
心中のかたわれだるう鰯の目
頭ならかくせる穴が混んでいる
干鰯その目貧しい海を見る
考へるよつにからんだ豆のつる
考へて来いと白紙を渡される

めざましい女性の進出

時実新子

作者が自分の作句風景から執拗に出ようとしていないことは個性を創り出すためにはいいことである。何年か何十年かそうやっているうちに、作品は紛れもなく一人の作者を生み出してくれる。

しかし、これがどうしようもないマンネリを生むことも事実だ。かてて加えて、川柳界のマンネリズムが輪をかける。

詩を意識した言葉が氾濫し、人々は我先にと言葉を探えて右往左往しているようだ。それから、詩は弱者のものという概念にも捉われ過ぎていてのではないか。

一度、自分を解き放つてみよう。川柳がピチピチとした目の輝きを取り戻すために、ゆっくりと自分の言葉を探ってみることだ。

さて今回のZ賞応募作品では女性の進出が目立った。私も含めて女はわがままを貫く性を持っているからして、その作品、なかなか面白かった。弱い「父」にうんざりした過

去を思いながら楽しく選ばせてもらったことである。

◇特選 萩原久美子

自己流に生きて吐き出す赤い主語

借りものの構図で啼くなカラス二羽

淋しさを許せば碧きミモザ咲き

エゴイズムの爽やかさ。流れすぎぬリズム感。何よりも自己の確立がめざましい。

◇秀逸 河瀬芳子

改札口 すこしひるんでから抜ける

国旗掲揚 黒い何かが歩き出す

女性には珍しい社会派の目が心強い。

◇秀逸 山本 乱

迷うことはない花びらの数が合う

何を捨てたのだろう火柱があがる

危機感の旗手。思い切りのよさ。一字アケの句が一句もないことにも拍手したい。

◇秀逸 村井見也子

忘れようにも神を騙した傘だから

蚊柱のなかへみじかい旅をする

三十句すべてが平均点に達するということは並々の手腕ではない。

◇佳作

菊地俊太郎(迷いから覚めたつもりの砂運

び)、海地大破(めし茶碗白も並べば面白し)

平田都子(影を追う軽い気持ちのはずだった

普川素床(残る心の駅の半分ほどが水、佐

藤みさ子(点線があるので父母を切り離す)

坂東乃理子(妹と私の鮮度見較べる)、上高

みゑ子(まだ生きている菌刷子がぬれている)

柿木英一(馬鹿正直に旅の駱駝は旅で死ぬ)

石部明(屈辱は死よりも冥く白湯ふくむ)、

西条貞紀(山鳥を目で追うもより訝なし)

情野千里(月赤しけものの方を向くけもの)

・特選(1句) 5点 秀逸(3句) 3点

佳作(10句ぐらい) 1点として集計。

向上の反面の既成化

尾藤 三柳

まず、膨大な作品量と誤字の量に、おどろいたり、すこしばかりシラけたりした。

かりにも、渾身の自己作品をこそ問うべきこの種シビアな競争の場に、表記不完全の原稿を投ずる安易な姿勢は即座に改めてしかるべきだろう。

個人の名を一句に取り入れながら、その表記を間違える(例えば「三島由紀夫」を「三島由起夫」)ようでは、その思い入れさえあやしくなってくるし、「瓜」を「瓜」と書いては、一句が成り立たなくなる。

川柳のごとき最短詩型にあって、句中二字の誤りは、死肉を盛るにひとしい。

と、のっけから苦言になって現縮だが、作品そのものは、総体としてそれなりの水準を維持しているといつてよい。

さて、二〇一点の参加作品から、初めに五十八点を選んだ。これらの作家は、作中の単作に見るべきものがあり、またキャラクター

として興味ある一面を期待させる。が、さらに全作品を通した総合的アピールを、わたしなりに計量化した結果、十七点が残った。

作者名を記せば、柿木英一、阿野文雄、牧野孝子の三氏をこの中から落とすには相応の決断を要したが、結果、別記の十四氏を今回の入選と定めた。

このプロセスで改めて感じたことは、絶えず新しい原野を切り拓こうとする現代川柳もまた、知らず知らずのうちに、刻々とステレオタイプ化しているということ、作品は生まれると同時に、つぎの瞬間から既成化していくということである。

単句ではとらえきれない情念や感性、思考のパターンが、一作家三十章という領域を重ね合わせることで、はっきりした姿を顕わしてくる。それは、父であり、母であり、少年であり、縁切り話であり、森であり、石であり、全体を量のように覆う感傷である。

ことさらに自性の面から逆照射することで、生きることの真実を陰翳として彫り上げようとする手法が、ともすると図式化しやすいことも、理由の一つに挙げられよう。

前年度も同じ趣意を書いたが、そうしたス

テレオタイプから一歩でも半歩でも脱け出す

ことへの方向性を感じさせる度合に応じて、

最終的な順位を決めたが、特選の樋口由紀子

さんと秀逸一位の加藤久子さんには、第三者

を納得させ得るほどの客観的な差を指摘する

ことは、むずかしい。

蛇口全開 獣のような花が咲く 由紀子

バーコード砂漠の骨はあたたかし 久子

ともに二句一章のメタファだが、このイメ

ージのどちらを採るかは、もはや鑑賞者個々

の問題というしかないからだ。

秀逸の2、3位には、それぞれ個性ある男

性作家を選んだ。海堀酔月氏の作品には粗さ

が残るが、それが一面での魅力でもあり、ユ

ニークさで、樋口仁氏の上に置いた。

佳作の十氏は、いずれも作家的特色を見せて

いるが、こうした競争においては、自己作

品の選択、配列などに幾分か戦略が必要で

あり、その可否によっては、実際の実力との

間にズレが生じたりもする、といった文脈で

の不満が、すこしずつ感じられた。

いずれにせよ、参加作品の年々の増加と向

上は、川柳文芸そのものにとってよろこばし

一人一派

細川不凍

川柳は今、多様化と平均化の微妙な時代に
ある。純粋な同人誌は影を潜め、殆どがサー
クル誌的な性格を持つ結社誌で占められるよ
うになった。その結社誌には、伝統・中間・
革新の作品が混在し、流派意識は薄れてゆく
一方である。つまり、結社誌の平均化が促進
されているのだ。と同時に、川柳作品自体も
平均化の道を歩み始めているのではないか。
川柳人各自が一人一派に徹するぐらいの気概
を抱いて、自らの個性を表出してゆく姿勢を
強く打ち出してゆかなければ、現代川柳は大
きな病果を内に抱え込んだ自価値的状况に落
ち入らないともかぎらないのだ。

さて、今回のZ賞選考は、昨年までの一次
選がなくなった分、余計にハードな選を強い
られた。そのような中で、の愉しみは、作品の品
を弁えた個性のある作家との出会いである。

〈特選〉渡辺和尾
・贅肉交差して雪の街には雪の禁句 和尾

・はりつけの刑いさぎよし海草茶漬 和尾
全作未発表での応募もさることながら、こ
れまで自分が築きあげてきた作品世界を、更
に超えようとする意欲(創作精神)が熱っぽ
く伝わってくる30句であった。日常性を題材
にしての即物的な把握といい、不条理の世界
を鮮烈に抽出した力感のある表現といい、実
にアトラクティブな味わいに富んでいた。詩
の時空を呼びよせることの出来る作家である
ことを、改めて確認させられた。

・秀逸 西条真紀・情野千里・広瀬ちえみ
馬疾る 夢のもろもろ短命な
いちにち中也 膝いちにちを噛り泣く
西条真紀は自己に執って書くことの痛みを
知悉した作家である。ナルシズムを根幹に、
自己を広げつつ自己へと向かう抒情の波紋
は、生の寂寥の深まりを見事に表出している。
・うっかりと三つ指をつく月の宿 千里
・花盛りの森で前歯を折ってくる 千里

千里作品のアクティブな物語性は興味に満
ちている。やや作為が顔を覗かせるものの、
既に自己の世界に逢着した作家の勁さが観取
される作風は、きっぱりとしていて清々しい。
・少し前は水を湛えていた私 ちえみ
・このバスでいいのだろうか 雪になる
日常身近を無理のない巧みさでもって、私
小説的に書く作者である。不安や悲哀などの
負の感情が作品の底流にあるが、女性にあり
がちなベタツキや絶叫が見られないのがいい。
へ佳作 梅崎流青ほか十名
・たんすの奥でいまも回っている映画 流青
・くらがり眼玉を洗う音がする 明
・欠けてゆく月と妻のうなじの光 省悟
・竹といちにち竹より青い息をして 律
・ぼろんぼろん泣いて野仏雪を着る 岳俊
・わが墓地を購う日 道化の馬跳ねる 一吠
・一度絞ったレモンを絞る寂しくなる 磔
・筋肉をゆるめてぐるぐるの門 俊太郎
・子を産みし縮図一枚膝にあり 千絵
・戯作者を鏡の中へ抱き起す 素蛙
・愛憐のてまぐら やがて石枕 浪
佳作十一名、いずれも個性の耀きを失つて
となく、存在感のある作品を呈示していた。

樹林を伐りはらう

寺尾俊平

どちらかという川柳の未来にやや不安感
と悲観的な印象を持ちはじめた私にとっ
て、今回のZ賞応募作品に若い人たちの作品
もたくさんあったことは、なにか新発見でも
したようなうれしさがあつた。若い人たちは
若い人なりに、がんばっていてくれるのだと
思うと、いいようのない心のスイングがな
かなか止まらなかった。

予選なしの全応募作品に対して私も全力を
ふるって、涙をふるって選択の斧をふり続け
たが、全作品の選とは斯くまで冷酷無惨なも
のであるかと、伐りはらった作留樹林の残骸
をみつめながら強く深く思った。

特選 石部 明

花びらをあつめて死者の形にする
火葬場の裏へまわれれば火夫のシャツ
死者の眼をゆつくり過ぎる飛行船
自分の語りというものができあがった感じ

で、ことさらな過激さもない表現の中から一
句一句に鮮明な構図が浮き上がる。なにか、
こころの中へつかつかと入りこんでくるよう
な感性と緊張の鋭さがある。

秀逸の一 渡辺和尾
半世紀伏して弾丸胃に錆びし
骨だらけの荒野に巫女は一人住む
優越性というものを失なわないで表現をし
ようとしている。この野郎”と思いがながら
その術中にはまったのかもわからない。
秀逸の二 菊地俊太郎
腹背のタイヤの痕がまだ消えぬ
夜干したシャツ血痕が消えている

無口な漢が下を向いて、ほつとひとひこ
とをいう。俊太郎のこのさめたユーモアが、
私を迷わせてしまふ。

秀逸の三 大谷晋一郎
いぶし銀になれぬ男の蕎麦枕
島は秋にひとりふたりと積み残す
ほんとにありそうでない話、なさそうでは
んとの話、掴みよのないものを、いつも握
らせようとする作家である。

佳作の十名の作家たちは、それぞれに鮮や
かな色彩と匂いがある。その強弱は別として
発散して迫ってくるものは、すべて個性的で
あり、云々するには頁が少なすぎる。
と、ここまでまとめてくるまでに、懊惱し
眩やき、怒罵した一人芝居ははかなく終って
しまった。結果云々よりは、全作品を斧で伐
りはらおうとした気負いと、くらやみの灯の
消えるごとき迷いを重ねたことが、快よい敗
北感みたいにひろがってきた。

川柳は、自分の現実から虚構への巨いなる
旅路を旅することく、その起伏の中でひとり
ぼっちのおらび声をはりあげるものであろう
か、虚脱感の中でそう思っている。

個性と伝達性との調和

橘 高 薫 風

二百を越す応募作品は、二百を越す違った顔を持っていたのは当然のことだが、いかにも雑多であった。Z賞がオリンピックと同じに「参加することに意義がある」との思いからの応募者の増加の故でもなからうが、選考に時間がかかった。Z賞がいよいよ權威を備えてきて、そこで好成績を獲得することが好作家の認証の近道との認識からか、肩に力が入りすぎた作品群が多かった。騎馬戦のように拳を振りかざして押し寄せてくるという感じである。Z賞の応募作は、どちらかというと詩性川柳と呼ばれる、言葉の生き死にに評価をかけるものが多い。しかし、一段と変化したという結果は、今年も見当たらなかったのは心残りであった。

山本 礫 作品

正しいことはむなしことだ寺山修司
薄肌老いたり杯をすぐ伏せる
天井が下りてくるのはもうすぐだ

ある 選 後 感

片 柳 哲 郎

長く川柳作品を鑑つづけて来た者にとって創作する者の職人的技術だけを展不されても感動など出来るものではない。愛情を注ぐに足るだけの価値を認めたいのである。もっと魂の扉をひらくようにして欲しいと正直に思う。栄光のZ賞応募作品中、48%が女性作家であって、その大部分が在来川柳に対して謀叛をもって当って来ている。それは新しい感覚をもってする謀叛であったが、ある意味で不器用であり、稚拙さの漂ったものが多かったと言えよう。にも関わらず僕が顕彰するのは、百戦練磨の男性作家よりも無技巧であるが、そのひそかな独自の表現には心を籠めたものが脈打っていて読者をとらえるのである。横山大観は「哀れの分らない人間に、よい絵が画ける筈がない」と言ったが、川柳作家も同じであると僕は思っている。決してセンチメンタルな作品を称揚する積りは無いが、迫真性とはこれらを無視したところにはない。

私の初心時代から平安川柳社で秀作を示しておられた作家で、堀豊次氏とともに私が大いに影響を受けたベテランだけに、Z賞への過剰な意識はなく、マイペースの作品が揃っている。その姿勢が感銘を深くした。

顔はいつもビックリ箱をもっている

課題吟と思えるこの作品にも、古きに陥ちず新しさに流されぬ自己の表現を持して、ウイットに富んだ味に仕立てられている。

広瀬 ちえみ 作品

さらわれる期待小さな舟が来る

さびしくて一日早く咲いてしまふ

少し前は水を湛えていた私

この作者の、この種の軽みのセンスブルを尊いと思う。キャリアや人柄について知るところ皆無であるが将来がたのしみだ。Z賞の大きな目的は、既成作家の顕彰にあるのではなく、将来性ある作家に励みを与えることである。

魂も肉も重いと思う日よ

逃れえぬならば炎となりぬべし

これらの句も重厚で良い。

樋口 仁 作品

終電の網棚にある残尿感

粥を炊く夕焼けの火をとってくる

立つことの哀しみがある寒玉子

うまい作家である。それ故に才が走り過ぎるきらいもある。

子のはるに拉致されてゆく父の春

この作者の作品から父子の句がやっとなくなったと評したのを記憶に止めているが、そのような句があつてこそ私は思うものだ。

山根 素蛙 作品

君だけに言う夕顔がまっ盛り

一斉につっかい棒が飯を食う

色即是空バラは僧形で散つた

自我のかった表現の多いが故に重厚な感じをもたらすものの生硬な語が邪魔をしている。最後に佳作の対象として残った十名の作家を列記して敬意を表したい。

林荒介、前橋多鶴子、大橋政良、野田はつ、

嘉瀬信柳詩、徳水政二、長町一吠、久保田美

椰、上島みゑ子、板橋映水の諸氏。

響いた。作品の中の鯉古を排し、適切な句語の配置は隙させ見せない。現代川柳に対する氏自らの公式さえ設定しているようで、安心して読める一連であった。作品は爽快であり言葉のもつ陰りさえ無い、創作力のこもった見事な叙法であった。

長町一吠氏は力の限りであった。生真面目な氏の作風を見ると、詩を考える契機と云うより例えねじ伏せても作品叩きしようとする執念を感じ、それが小手先なものでないだけに迫力を感じる。どこを斬っても一吠氏が生のまま飛び出してくるし、その劇しさは読者を呪縛するかの如き「乱」を持っている。

渡辺和尾氏は天才型と言つより秀才型の貴重な作家だと思つ。全く退屈させず品位のある叙法は、一気に読み上げてゆける不思議な次句への契機をはらみ、一句に序破急を持っている。こう言う作家を知ることが楽しい。

上島みゑ子氏の作品は無理のないイメージの構築が良く、浅いがための反転のおぼろさが霧のように流れていて愛惜を覚える。それは鑑賞者のイメージを阻害するような句語や結論を極力押えているところから来るものであつた。

吉田浪氏は鮮かな作家であると言つ印象が

とまどいの中で

森中 恵美子

朝日新聞夕刊連載の「現代人物誌」に登場した、作家島田雅彦さん（二十八歳）のことばを読んだ。Z賞選考の時間の中で。

「文学賞ですか？ 芥川賞に関しては六回落ちて最多落選タイ記録。単独トップを狙ってたんですが……」「担当編集者から通達があり、もうこれ以下候補にしないといわれた。こんどは選ばれるばかりでなく、文学界の青二才が大家の作品を選考するような賞をつくりたい。これは冗談ですが……」

この冗談がまことに痛烈である。選考する側の作家に対しての気持を卒直に吐き出したことばであろう。

「Z賞」なる大きな賞に挑む作家たちの、作品にはじめて向きあってみて選考するということの傲慢さと力不足を恥じた。

消えた作家が惜しい

大野 風 柳

正直言ってこんなに膨大な作品群を、まとめて拝見したのは初めてであった。六十句以上の作品を、しかも一人三十句を一組として選び出すことの難しさとの戦いであった。

このZ賞も定着し、作家も作品も年毎に充実して来たことは大いに賞賛してよからう。

誰もがその結果を興味と期待で待っていることだろう。

私自身も選句が予定よりも遅れながらも、誰がその榮譽に輝くか、実に待ち通しい。

さて、結果はどつあれ、私なりの卒直な感想を申し上げたい。

二百人を越えた作品を鑑賞し選別する段階で、気になったことがある。それは、選者も人間だということ、つまり一カ月以上も費やす選句の場合、自分の感情の起伏の影響が怖かったのである。

そこで考えたのが、一挙に多くの作家の作品をつづけて見るということであった。それ

しかける数日を過ぎたものである。

「Z賞」も八回を数える。過去七回の作品をすべて読み返す時間を持たぬが、はじめての体験を感謝しなければならぬ。

ことばを読むことのむつかしさ、作品の重さに押し潰されてゆく自分とのたたかいを、ひさびさに味うことが出来た。

ひとつのパターンに馴らされ、ふり返ることばかりの私には、よい刺激であったように思う。とにかくここに集る作品は若い。

高齢化の波は、川柳にも打ちよせている中で若い作家の作品に刺激され、興味を深くしながらも、とまどいをかくすことは出来ぬ。

あまりにも自由に書くことばが作品からこぼれ落ちてゆくリズム――

。作品の肉付けに走るためのことばがころの肉を削ぎ落す――

。やはりもの的なことばもひとり言もマンネリ化するもの――

は一人十句ずつに絞って見ることしか無かった。六十余句の中から入選句を選ぶことは難しくないが、三十句の作品群を対象に作家として選ぶことは大変な努力である。

まず前の十句を一組としてタテに拝見していった。これが私の考えた知恵である。十句を見ればその作家のレベルは分かるもの、これが私の一次予選となった。

こんなことを公表する必要はないし、また批難を浴びることは覚悟している。しかし、この部分をはっきり申し上げておかないと、私自身が苦しいから述べたまでのこと。

私の結果は別記の通りである。全般的に言えることは、十七章子のリズム感を大切にしたいこと、表現法よりも作品の纏え方、さらに作家のころを重視したことなどである。三十句の中で秀れた二、三句があっても全体として消されるし、逆に三十句の中で幼稚な句

それ等を踏破する若い力を望み、期待するものである。

花博の開幕も近く、全国各誌の「賞」もはややかに競いあつた。

今後「賞」というものは大なり小なりに、また功罪を引きずりながらエスカレートしてゆくであろう。

選考に対する批判の声も大きい。一九九〇年から二〇〇〇年代に向けてゆく川柳のひとつの課題としてこそせねばならぬ。

特選・秀逸・佳作にランク付ける十四名の作品に共感、好感を持った。

村井見也子（京都）の作品。身のまわり、身のうちから吐き出されるものをやわらかく包むことばの中に、京おんなのもつ芯の強さが感じられた。作品全体を流れるゆとり、川柳の息のながさがあるだろう。

つづく大谷晋一郎（高松）、佐藤岳俊（岩手）、梅崎流青（柳川）作品も息がながい。物があふれ、情報があふれる現代、性も年齢も仕事も立場も違ふ、まして風土の違いを生きる作家のぬくもりを求めている結果をたのしむものである。

が二、三句あるために三十句が消されるものと私も気付いた。

そもそも作家を評価する場合に何十句が限度（上限と下限）なのか――この辺の討議があってもよいのではないだろうか。わずかに三句の失投のために消えた作家が惜しい。

私が選んだ作家から一句ずつ掲載してみた。尻尾振りながら喜劇の中で死ぬ 板橋映水

これは頭ではありませんが私の帽子です 普川素床
いっぽんの縄からさむい物語 嘉瀬信柳詩
歩を一つ握って風を読み切れぬ 盛公秋水
思ふことありや柿色に柿が生る 芳賀弥市

雑踏が殺人犯をつみ込む 坂東乃理子
矢印を私の部屋へ向けておく 新 正子
ぶらぶらのボタンおまえも必死だね 広瀬ちえみ

かもめーる飛ばさん手裏剣のよつに高橋かつき
鳥籠を覗く変化のない朝た 海地大破
腐ってる手摺の長さ旅の長さ 菊地俊太郎
猫一族の復讐めしを食べ残す 外山あきら
殉死などもう考えぬトマトの朱 山根素蛙
左手で書く恋文はおそろしい 情野千里

逆上がり 不意に湧き出る父の首 林 荒介
ペーパータオルの湿った山の他人の手 みさ子
猿のメガネに叶う猿回しやあーい 大橋政良

Z賞という樹の下で

福島真澄

最近、作品の多様性について発言が余り見られなくなったか、それは多分、多様化が日常化して、殊更問題視する必要がなくなったからであろう。

この多様化という動向は、かつての権威や、文藝的な向上志向の水準を、今日の多様で相対的な価値基準に組み込み、価値体系の平準化を期せずしてもたらした。

かつて、川上三太郎師は、或る会合で「ずーっと先のことが(と前置きをされたあと)川柳は現代詩の一分野として生き残れるかも知れない。」と、予見を述べられていた。川柳の現況の中で、この先見性は今も凄い。

今回の応募作(三句の量とテクニク等に圧倒されながら、今まで書かれなかった軽やか平均感覚や、ふっとコモンセンスに立ち返る富んだ批評性などが、作品として、すでに書かれていたことをよるこぼしく知った。特選 坂東 弘子

野火走る老母に深い土踏ます
眠りつつける母のまなこに 野火ありや
蒼天に流浪となるも竹の櫛

風群れてくるはらからの静かさに
青い馬になるまでしゃがむ蓬い森

昏昏と睡る老母の土踏ますを、こぼした泪で拭いても、野火跡を踏み刻んだくらさは、深くなるばかり。蒼天に預けた泪や慟哭は、いつか青い馬に化身して、蒼天の深みに染み入るように翔り去った。抒情の理念化は、リアリズムの存念に赴かず、ロマンチズムの詩化を選びとった一型式である。

準特選 岡崎 一也

みどり吐きつくしダリは雨に逝く
老斑の動かざる軒深ければ
茅蝸のすくと昏れて仏らと

言葉の働きを知り尽した岡崎氏の省略法は、現実感を折り畳むように存念を深める。ダリの緑り広場の、溶解寸前の時計が二時

初めての全句選

杉野草兵

一次選で、優秀な作家が落とされてしまふ可能性が有り得る。そのような意見が、このZ賞を支持して頂いている、複数の有力な方から寄せられた。事務局・関係の人達にお集まりを願ひ協議。一次選を廃し、全応募原稿を、選考委員に送り、見て頂くことになった。

反対も有りましたが、優秀なひと、一人位なら落としてもよからう筈がない、と言う事になったものです。実際に選に当たってみて、大変でした。二百一名・六千二百句、に挑まなければいけなかったのです。

二月十八日(日)から今日迄の四回の日曜日を聞きました。ガバリと、午前二時に起きたり、バスの中、列車の中。温かかった弘前城。神経が集中出来れば、すぐに応募原稿を上げた。第一次選・五十四名。この多さには、本当に困った。二百人から十人位選ぶのだから、バツバツと、切り捨ててゆけばいい。位に思っていたんですから。

第一位・長町一吠氏。受付番号四九。読んでいくうちに、井戸の中に静かに、そして冷たく、深く引き込まれてゆき、終章の

冬眠せんとする病妻を手囲いに
逆旅から逆旅へ妻のにぎり蛾
どこまでも病妻を想うて凍る魚
結婚記念日 怒涛のごとし鮫の群
哭かんとして哭かず眼なしの魚も脚なき馬も

を読み終え、暫く体を動かすことが出来なかった。仲のいい夫婦。只、仲のいい夫婦。そんな生ぬるさが微塵も無い。刃物のような愛。有るはずの無い、冷たい迄の愛。に驚かされたのだ。迷う事無く一席にさせていただきました。

以下、迷いながら、スケールの伊東律さん(仙台)。この賞既に受賞の大破さん、刺激を続けて下さい。荻原久美子さん。(東京)

を昨日まで鈍く鳴らした。
準特選 長町 一吠

眼底に挽馬搏たれて嘶けり
淳夫忌や街しるじろとして溺れ
冬眠せんとする病妻を手囲いに

いつ如何なる時でも、一吠作品の切実な真心に搏たれるが、近頃の喩化への試作的な取り組みは祈りにも似て、澄んだ明るみを内実に加えられた。声を嚙む作品は多くはない。準特選 野沢 省悟

血の濃さは雪の深さはまぼろしで
星に向って雪を降らせるとき父は
口笛を吹くと化石の魚が動くかに
淡明でいて、想いの深まりに音がなく、在ることに関わる哀切さは空に映るようだ。省悟作品のポイントに、「いとおしみ」が置かれる時がある。それが時には小さな掌だったりする。新作30句、幾許かの作品にむらがあったが、テーマやモチーフに変化を設けず、ゆるやかに内在を展げた。

連作未発表の渡辺和尾作品は、スタート台での一斉ダッシュに阿修羅の如くであった。その他、応募作の大半に1句から5句までで秀作が光るようになつたことを申し添えたい。

次に時間切れで十名に絞れなかった佳作十二名の方々。最後に、僕の膝にいつまでも残っていた、十九枚の原稿の作家を列挙し、勉強をさせて頂きましたことに感謝致します。

- 一五九 桐越 千絵氏 (広島市)
- 一七〇 大谷晋一郎氏 (高松市)
- 二二四 梅崎 流青氏 (柳川市)
- 一〇三 渡辺 和尾氏 (東浦町)
- 〇六六 長井すみ子氏 (福岡町)
- 〇八五 前橋多鶴子氏 (多古町)
- 一九六 佐藤 奏月氏 (松原市)
- 一七一 大橋 政良氏 (砂川市)
- 一四一 中村美美子氏 (坂出市)
- 一三七 村井見也子氏 (京都市)
- 〇九六 万 迷多氏 (宮古市)
- 〇四七 芳賀 弥市氏 (仙台市)
- 〇九四 岩崎真里子氏 (黒石市)
- 〇九三 佐藤 岳俊氏 (胆沢町)
- 〇八二 林 瑞枝氏 (米子市)
- 〇五三 宗村 政巳氏 (猿払村)
- 一三六 佐藤 幸子氏 (札幌市)
- 〇八三 宮本めぐみ氏 (仙台市)
- 一三八 伊東 マコ氏 (山形市)

かもしか通信販売部

- ★「かもしかの眸」第2集 かもしか川柳社 刊 価二〇〇〇円 丁二〇〇円
- ★杉野草兵柳句集「学生日記」 かもしか川柳社刊 B6判 価四八〇〇円 丁二〇〇円
- ★福井柳沙句集「いのち」 かもしか川柳社刊 B6判 価二五〇〇〇円 丁三二〇〇円
- ★かわうち4人集「さかすきの彩」 かわうち川柳社刊 B6判 価五〇〇〇円 丁二〇〇〇円
- ★かわうち12人集「銀杏の実」 かわうち川柳社刊 B6判 価八〇〇〇円 丁二〇〇〇円
- ★「東奥川柳集」東奥日報社刊 同社大会秀吟集 B6判 価三〇〇〇円 丁二六〇〇円
- ★五十嵐さか江句集「雪の勲章」 泉文芸協 会刊 B6判 価五〇〇〇円 丁二〇〇〇円
- ★合同句集「花丘」第1集 岩木病院職員川柳会刊 価五〇〇〇円 丁二〇〇〇円
- ★北野岸柳絵手紙句集「風の街から」 北の街社刊 B6判 価一五〇〇〇円 丁三二〇〇円
- ★時実新子句集「月の子」 たいまつ社刊 B6判 価一五〇〇〇円 丁二六〇〇円
- ★時実新子著「川柳をはじめ人の為に」 池田書店刊 価九八〇〇円 丁三二〇〇円

- ★渡辺和尾句集「うたともだち」 みどり選書 A5判 価二〇〇〇円 丁二六〇〇円
- ★佐藤岳俊評論集「縄文の土偶」 青磁社刊 B6判 価二五〇〇〇円 丁三二〇〇円
- ★田口麦彦句集「昭和忌」 北羊館刊 B6判 価一八〇〇〇円 丁二六〇〇円
- ★藤村秋穂随想集「秋稗のひとり言」 あきらめの会刊 B6判 価二〇〇〇〇円 丁二二〇〇〇円
- ★天根夢草句集「掛合村」 ゆめ書房刊 B6判 価二〇〇〇〇円 丁二二〇〇〇円
- ★外崎勝・今靖行共著「おらほの力士たち」 北の街社刊 価二二〇〇〇円 丁二六〇〇〇円
- ★大友逸星句集「なまけものうた」 B6判 価五〇〇〇円 丁二〇〇〇円
- ★中沢雅子句集「夢見舞」 みどり選書 A5判 価八〇〇〇円 丁二二〇〇〇円
- ★佐藤桃子句集「花あかり」 みどり選書 B6判 価八〇〇〇円 丁二二〇〇〇円
- ★野沢省悟句集「ほつれ火」 11・5×18・5センチ 価七〇〇〇円 丁二〇〇〇円
- ※申込み・かもしか川柳社(切手代用可)
- ※かもしか川柳文庫友の会・会員募集 定期購読者に既刊一点呈上。事務局 030青森市石江字富田二一九一四 野沢省悟片方

都道府県別の参加者数

北海道	14	岩手	12	宮城	12
秋田	0	山形	4	福島	8
茨城	1	栃木	0	群馬	1
埼玉	2	千葉	3	東京	14
神奈川	4	山梨	3	長野	8
新潟	2	富山	4	石川	1
福井	0	岐阜	0	静岡	4
愛知	3	三重	3	滋賀	1
京都	7	大阪	14	兵庫	14
奈良	1	和歌山	0	鳥取	8
島根	1	岡山	8	広島	2
山口	3	徳島	0	香川	14
愛媛	1	高知	5	福岡	10
佐賀	0	長崎	0	熊本	0
大分	0	宮崎	2	鹿児島	0
青森	9	計	201	名	

応募用紙は事務局にお申しこみくださると専用紙をお送りいたします。そのときは返信用封筒を同封ねがいます。なお専用紙以外の応募はご容赦ください。

川柳Z賞選考委員会・事務局

茫洋と生きて

桑野品子

例年より十日ほど早い根雪ゼロ宣言、ひと冬の雪を吸った大地は黒々と濡れて、花芽にやさしい。と思っていたら、雪は夜半から本気で降り始める。これが雪の果てか何度思ったことか。北ぐにの弥生は天も人もそぞろ神に憑かれて逡巡する。

作品の想いも雪の中に在ったり、爛漫の春を歩いたり、こもこもの三月号であった。

背かれて未練の雪に濡れてみる 七味
雪のんのん追憶の淵深くなる 藤花
覆いつくして雪のやさしさ雪のあくどさ

雪原野三尺堀ると亡父が居る 州花
清浄な雪の冷さには、ハッと厳しいものを 岸柳
自覚させる不申議な霊域がある。亡父と向き
合っため全身をバネにして雪原を三尺堀る、
そこに北野岸柳さんの原風景が渺渺と展がる。
そのように思えてならない。透徹した作品で

茫洋と生きて蛙の背に止まる 和美
新人であっても最近はず達が早く、三年位で堂々と手馴れた句を並べる。恐れ入るばかり。千田和美作品の「北の角笛」はそつがない。そんな中で前掲の一句に、中村草田男の「遠蛙独りで生くる齢なる」が浮かんでくる。ぼろっと零れたこの偽りなき感情、傑出した俳人というより裸の人間の親しみを感じる。蛙の背に止まる和美さんも、少しづつ自分の齢を問いはじめたのであろう。「茫洋と生きて」がいい。他句になかった醒めた目をみた。雛まつり亡父の歌など遠くする 和子
父の瞳が細まるのは娘の成長を楽しんでるからだろ。雛の宵など父として鷹揚に振舞ってはいるが、耳も目も娘たちの華やぎの中に上り込んでいる。そんな父と娘のてらい

を知り抜いての高田和子さんが、さらりと灯

した雛あかりの一句。 てい

覗かれて我が腸を野晒しに てい

乱れそうな僕をライトの下に置く てい

縁なら並んでみよう さらし首 文音

骨太いというより、開き直りの精神が、鑑

賞の先を走り抜けていく。片岸でい一さんの

自負と理解しよう。

福田文音さんのさらし首は、おっとりして

てい一さんの野晒しと対照的。それぞれの思

感があって面白い。

たゆとつて風花が咲く無縁墓地 てる

日本語には情感の漂う美しい言葉が沢山あ

る。「たゆとつて」もそのひとつ。その語感

に、風花が流路して、無縁墓地をあわく濡ら

し作者の禱りと溶け合っていく。古典は美し

い言葉の豊庫、時には万葉や中世文学を繙く

のもいいなと思う。

注目した作品

春の来る方へわたしの椅子を置く ちえみ

春のひかり片方の耳小鳥とならず 省悟

中年の恋てのひらにある置火 圭子

うすあかりのまちははたらくひとのこえ

寄生木